

大網白里町 ようあんじ 養安寺遺跡

養安寺遺跡は、縄文時代中期から後期の集落跡です。平成 19 年度から 21 年度に実施した発掘調査で、住居跡や斜面貝層などから多量の遺物が出土しています。とくに、中期(約 4,500 年前)の斜面貝層からは、貝殻に混じっておびただしい量の土器・石器・動物遺体が出土しました。整理作業はまだ始まったばかりですが、斜面貝層から出土した大量の動物遺体と、それを素材として作られた製品について速報します。



斜面貝層の剥取り(はぎとり)を行いました。貝層の断面に樹脂を吹き付けて薄く剥ぎ取り、板に張り付けたところです。



貝殻や骨の保存状態は良好です。色艶がよく残っています。貝の種類は、現在も九十九里名物となっているチョウセンハマグリとダンベキサゴ(ながらみ)が中心です。



斜面貝層の1グリッド (2m×2m、厚さ約2m) から、これほどたくさんの骨が出土しました。詳細な分析をする前に、大まかに分類してみたところです。

シカとイノシシが目立ちますが、小動物や魚、ヘビなどもたくさん入っています。黒く焼けた骨が多いのも特徴です。また、骨・角・歯(しが)の加工品(骨角歯牙製品)もたくさん見つかりました。製作途中のものも目立ちます。



おもな骨角歯牙製品を並べてみました。質・量ともに、縄文中期を代表する資料といえそうです。保存状態がとても良いのも特筆されます。



装飾品の優品を並べました。細かな細工や、丁寧な研磨を施したものが目立ちます。中央はシカの角の枝分かれした部分を素材としています。まず半分に割り、薄く削り込んだ後、石器による擦り切りで透かし孔を開け、最後に全体を研磨仕上げしています。



先端の尖ったものを並べました。骨鏃(こつぞく)、縫い針、髪針(髪飾り)などがあります。一番長いものは大形の鳥の骨を素材とし、一端を磨いて鋭く仕上げています。